（５）東海道の整備と島田宿の発展（江戸時代）

関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は東海道をはじめとした五街道の整備に取り掛かり、宿泊施設としての本陣、旅籠と人馬継立の業務を行う問屋場をもつ宿場を整備しました。島田宿、金谷宿もこの時、東海道における宿場の一つに定められました。島田宿は山沿いの元島田付近にありましたが、天正の瀬替えによって大井川の流路が南へ移ったため、最短コースとなる現在の本通り付近に移転しました。しかし、慶長９（1604）年及び翌年の大洪水で宿場が流されたため、一時、以前の地（元島田）に宿場を移しました。大井川の築堤工事によって流路が安定すると、慶長 19（1614）年に島田宿が移転し、現在の本通りの地に戻りました。

東海道は幕府の置かれた江戸と京・大坂を結ぶ重要なルートで、中でも島田宿と金谷宿は要衝大井川の両岸の宿場であったため、江戸時代を通じて幕府直轄領でした。また、その周辺地域は旗本知行地や掛川藩、田中藩のほか遠方の藩領が混在し、支配体制は複雑でした。なお、川根などの北部山間地は幕府の御用林が設定され、直轄領でした。

多くの旅人と物資や情報が行き交う島田・金谷の両宿場は、旅人が支払う飲食、宿泊代で大変潤いました。幕府の交通政策のため大井川には架橋と渡船が認められず、旅人は川越人足の肩車や彼らが担ぐ連台と呼ばれる台に乗って川を渡りました。しかし、大井川は雨が降って一定の水量を越えると危険なため通行不能となり、旅人は島田、金谷の宿場に逗留を余儀なくされました。このため、渡渉料と川留めで支払う宿泊代は両岸の宿場経済を支えました。街道から離れた周囲の村々は、東海道の日常清掃や大井川の護岸修築、島田・金谷両宿場の問屋場が行う継送り業務に必要な人馬の提供といった助郷役を担い東海道を支えました。天正の瀬替え以降、大井川の河川域だった川原が耕作地になると、金谷、六合、初倉で大規模な新田開発が進み、新たな村が生まれ、現在につながる集落を形成しました。

大井川の流路が狭まったとはいえ、大井川は度々洪水を繰り返したため、大井川下流域の村々では、農家は屋敷の形を三角にして周囲に溝と土塁をめぐらす舟形屋敷と呼ばれる独特の住宅形態を取り入れ、水害から身を守りました。島田宿も当初は宿場全体の周囲を御囲堤と呼ばれる土塁と水路で囲い大井川の水害に備えていました。

宿場の経済力の発展は文化面にも大きな影響を及ぼしました。島田宿の遊女が寛永年間（1624～44）に始めたといわれる島田髷は、全国に広まり江戸時代の女性の髪型の一つとなりました。また、元禄年間（1688～1704）に俳人松尾芭蕉が島田に逗留し、宗長庵を訪れ、島田の文人らと句会を開くなど交流を温めました。この時、大井川や地場産品として盛んにつくられていたお茶を詠んだ句を残しました。３年に１度御旅所への御渡りを行う大井神社の例祭として、大奴が豪華な帯を下げて町を練り歩く島田大祭も、ちょうどこの頃から行われるようになりました。

写真 1-18　大井神社の御囲堤

写真 1-19　宗長庵趾

図 1-18　江戸時代末期藩領図

（６）近代茶業の展開と大井川の林業、木材加工・製紙業の発展（明治・大正時代）

江戸時代を通じて大井川上流域では茶を栽培していましたが、19 世紀に入り江戸で蒸し製煎茶の需要が伸びていることを知った伊久美の坂本藤吉は、生産が盛んな近江にみずから赴き、茶農家を自宅に招いてその製法を学ぶとともに周囲の農家にも広め、この地域に蒸し製煎茶の製法を導入しました。さらに、横浜が開港し海外との貿易が始まると、伊久美村の人々は江戸だけでなく横浜の外国商へも積極的に売り込んで茶の海外輸出に乗り出し、近代静岡茶の発展の先駆けとして活躍しました。

時代が下り、明治維新による江戸幕府の崩壊は、この地域にも大きな影響をもたらしました。徳川家が静岡藩を設立すると旧幕臣は江戸から駿府に移住し、このうち江戸城開城の際に徳川慶喜を警護していた中条景昭ら約 300 名の侍がこの地域に移り住みました。また、江戸時代を通じて幕府の交通施策として行われてきた大井川の川越しも廃止され、両岸の川越人足は仕事を失いました。旧幕臣と川越人足の一部は海外輸出が好調だったお茶の生産を目指し、それまで荒地となっていた牧之原台地に入植して茶の栽培を始めました。

川越制度の廃止にともなって、大井川は船で渡れるようになり、さらに大井川上流の川根と島田及び金谷を結ぶ舟運が計画されました。川根地区に住む又平庄太郎は家山の大井川河岸を整備して船着場を設け、高瀬舟による物資の運搬を始めて、家山周辺の発展に大いに貢献しました。また、大井川上流の木材を伐り出して川根から島田、金谷まで流す川流しが行われはじめました。そのため、川根地区では茶業とともに林業が盛んになりました。大井川下流の島田地区では木材加工業が発展し、失業した川越人足の受け皿となりました。島田、金谷の両宿場は、大名の参勤交代がなくなったため本陣・旅籠の宿泊者は減り、さらに明治 23（1890）年の東京―神戸間の鉄道開通により東海道を徒歩で行き交う人々が激減したため、両岸の宿場経営は大打撃を受け経済構造の転換を余儀なくされました。

明治 28（1895）年になると、幕末から明治にかけて財閥を築いた大倉喜八郎は、紙の需要が伸びることを見込んでかつて幕府の御用林だった南アルプスの山林を購入し、明治 40（1907）年に東海紙料株式会社（現：新東海製紙株式会社）を設立するとともに、豊富な水資源を活用するため水力発電所を建設して製紙業を興しました。

文化芸術の分野では、島田青年会の幹事有志が地域文化の高揚を目的に大正 8（1919）年に結成した「蘭契会」が文化芸術活動を活発に行い、東京から一流の学者や文化人を招いての文化講会や夏季講座、音楽会、展覧会などを実施しました。

写真 1-20　製茶元祖坂本藤吉頌徳碑

写真 1-21　中條金之助景昭之像

図 1-19　近代の歴史遺産